

アニメ部部誌



H21.12.24

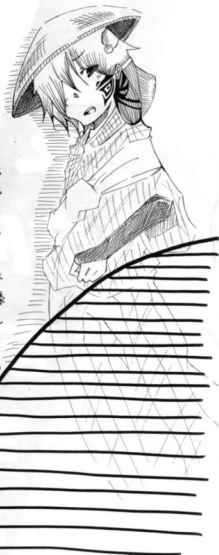
目次

題 → 「和」

- 3 牛若丸
- 4 真田幸村
- 5 NINJA
- 6 無題
- 7 龜山
- 8 舞姫
- 11 日本に遊びに来たよ
- 13 落乱
- 15 無題
- 17 今日は夏祭り!
- 27 無題

智川 巴
智川 巴
モモ
モモ
佐藤
朔羅
尾藤
うめぼし
中村
智川 巴

きののはた





牛若丸

真田幸村









「舞姫」

広場を優雅に舞う人が1人。誰も彼もが彼女の舞にひかれ、見とれていた。

彼女の名は柚嬢亜、流浪の踊り子であった。人々からは、風の舞姫と呼ばれている。気づけばそこにいて、気づけばいなくなっているからだ。

彼女の舞にひかれぬものはない。商人とて、農民とて、領主の息子とて、例外ではない。

この町の領主の息子も、偶然みかけた彼女の舞にひかれていた。いや、それ以上であろう。

この町に風の舞姫が来たという噂は、またたくまに町中に広まった。

使用人から領主の耳にも…。

興味を持った領主は、その踊り子を屋敷へと招くようにと命じた。

そうして今に至る。

舞を終えた柚嬢亜は、領主に向かって一礼をした。

「素晴らしい舞であった。」

「お褒めにあずかり光栄です。」

「名はなんと申す？」

「柚嬢亜と申します。」

「近々、豊稷祭を行う予定なのだ。そこで、舞を披露してはくれぬか？」

そなたがいれば、皆、喜ぶであろう。もちろん、謝礼もはずもう。

どうだ？この話、受けてはくれぬか？」

柚嬢亜はしばらく考えると「お受けいたします。」と答えた。

そして、彼女は礼をした。

「晴葵、豊稷祭までの間彼女に町の案内をしなさい。」

「はい、わかりました。」

「この町で一番有名なのは領主邸から広場までのこの道なんだ。」

晴葵はしどろもどろになりながら話している。

「そう。」

「舞、すごく綺麗だったね。」

「ありがとう。」

晴葵が何を話しかけようと柚嬢亜はそっけなく答えるばかりだった。

彼女にとって人に心を開くことは、危険を意味することだったから。

「もう、いいわ。ここで踊ってから帰る。」

「見ててもかまわない？」

「好きにすれば。」

次の日も、彼女は踊っていた。音楽なんて何もない。

静寂を伴奏にして、彼女は踊っていた。

ポロン。

竖琴の音が鳴る。少し頼りなさを感じるほど、優しい音だった。

一奏でる音に耳を澄ましてごらん。音は、その人の性格をよく表す一
遠い記憶、今は亡き親の言葉が彼女の脳裏に蘇る。

音も踊りも終わり、一瞬のあとで、盛大な拍手がおくられた。

そこで初めて、柚姫亜は演奏者を見た。

豎琴を持って曖昧に微笑んで、晴葵が座っていた。

その笑みに応えるように、彼女はそっと笑った。

数日後、柚姫亜と晴葵は楽しそうに広場までの道を歩いていた。

「始めの頃は、こんな風に話してくれなかったよね。」

「ああ、そうだったわね」そう言いながら柚姫亜は笑う。

「人に心を開くのは危険すぎるから。」少し暗くなって彼女は言葉をつづける。

「えっ、どうして。」本気で分からない様子の晴葵に柚姫亜は苦笑する。

「踊り子ってね、色々あるの。…。求められるのは舞だけではないこともあるから。」

「あっ、ごめん。」すまなそうにしている晴葵をみつめていた柚姫亜は突然、笑い出した。

「あなたって思っていることが本当に顔にでるのね。」

「よく父上にも言われるよ。そんなようじゃいい領主にはなれないって。」

「それなら、私と一緒に旅をして、豎琴を演奏してほしいわね…。なんてね。」

2人は同時に笑い出す。楽しそうに笑っていても、少し切なく聞こえる笑い声だった。

その夜、柚姫亜は与えられた部屋で、泣いていた。

こんなにも好きになるなんて思ってもいなかった。

孤独に疲れていた。ただ自分らしくいられば良いと思っていただけだった。

なのに、必ず訪れる別れが辛い。

「柚姫亜、入ってもいいかい。」

「ええ、いいわ。」

彼女は慌てて涙を拭った。

「泣いていたの？」晴葵は問うが、柚姫亜は答えず、微笑んだ。

しばらく、沈黙がつづいた。

「柚姫亜、好きになったんだ。この町にずっといてくれないか。」

「それはできないわ。いても、どうしようもないから。でも、私も好き。」

2人は優しいくちづけを交わした。

豊稜祭まで3日という日のことだった。

2人は残りの日を大切にすごした。

柚姫亜は豊稜祭までの短い恋と思っていた。

でも、晴葵は何を捨てても一緒に行きたいと思っていた。

とうとう豊稔祭の日が来た。町中が朝から賑わっていた。

昼すぎ、晴葵の豎琴の演奏にあわせ、柚姫亜の舞が始まった。

数曲、柚姫亜が踊ると、その後は町の人々も混ざって踊り始めた。

空は少しずつ暗さを増していった。

日が沈み、空も完全に暗くなったころ、柚姫亜は人々の輪から抜け出した。

それを見つけた晴葵も抜け出すと、屋敷へと戻っていった。

柚姫亜は1人、真っ暗な道を歩いている。

町の明かりも、人々の声も、ここまでは届かない。

ふいに彼女は後ろから自分の名を呼ぶ声を聞いた。

耳を澄ませば、馬が大地を駆ける音も聞こえてくる。

しばらく、彼女は立ち止まっていた。

「柚姫亜!!」

今度は彼女ははっきりと、聞いた。愛する人が自分の名を呼ぶのを…。

頬を一筋の涙が流れる。決して流すまいと思っていたのに。

「どうして・・・。」呟きが漏れる。

柚姫亜のもとまで来た晴葵は、そこで馬からおりた。

「僕は、ずっと柚姫亜といたい。だから、ついていくよ。」

そういった晴葵の表情に、迷いはなかった。

「仕方がないのね。」　　今までで1番の笑顔だった。

それから、風の舞姫とともに、楽師が旅するようになったという。

日本に
遊びに来たよ



あとがき



2回目の部誌でも。今回も遊びました(笑)

だいぶ前に書いた原稿で あとがきと 全然違う…。←

図書室にヘタリアが はいって とても ホクホクしています。

ヘタリア好きが 増えるといいなま…。

原稿を書いた時に ペンの インクが 乾かなくて
筆ペンと ボールペンで 描くという ハプニング!!
ふるえる手で描き上げました 。。

テーマが『和』という事で 日本です…。

それぞ みんなに 着物 着せた 結果 おんな事に…。

乱文 野絵 失礼 いたしました。。



落乱



あしがき

はじめて、うめぼしを

今回は、私の大好きな落書きの

日々笑顔を描いてみました♡(いやさん、いやさん)

もー あしがき、何かけばいいのかわかりませんが、

落書き好きな市、お友達になっ下さーい







反省!!

こにちは! 1年中村です! (^o^)

2回目の部誌モチモチはきちがえ(笑)

あとがきの方が和・伊さがでてる...

れっ☆反省!(丸)

時間があればBASARAの誰が描く

はずだったのに... 自分のばかあ!←

ごめ (・ω・)ノシ









……山之助、
遅いですわね……

高嶺 乃々花
高飛車。F.C.。
高校3年生。



ブ
□
□
□

待
た
せ
た
ね
!

白背広。↗

キラ

キラ

バ
タ
ン

やあみんな

金沢 山之助
お金持ち。
高校3年生。

ガ
チャ



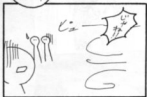
たこやき

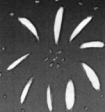












誰にでも
ありがとう！
—おわり—

END



おいまし
こいねにっ



ん？ おま
財金に拘ってんだ
中にお金をいれんワ

どつたまま
あんなにやせん









——こめんねえ



お嬢さんね、何だか
欲しい・マヨネーズ人
手マねえ……



いいお別れは

元々下等な

物・馬鹿でして

たぶん……



104

——

つまんないの

あとがき

えーまずは何と云う訳しめは...
 じい、ちやけますと、今日の郵記がイッパ
 遅れたのは10時30分です orz
 自分も提出時の決めであって
 自分も一番提出遅れてしまいました
 もう土下座通りにして平伏です。平伏。
 歩け前進でもしてあげて下さいです

作品は短編漫画になりました
 自分を追い込みたいために一発描きです
 失敗作で部屋に5枚くらい散らまそう
 えんはちの子と、路に落ちている
 主人が財布箱買ってくるんだって
 んですか 却下したい
 しかも最初は幼女ま拘
 ラブコミなやつも描いて
 いたり... <

色々見辛い所やあると
 思います(・ω・)
 とにかく郵記の苗さん
 お得たせて頂きに
 すぎませんでした。ー。!!!

不備



ありがとうございました。

